

秋草と蟲の音の印象

初秋の一夜

『それぢやあ行つてまゐります』

『いつてらつしやい御機嫌よう！』

艶々した雨合羽に身を固めた車夫は梶棒をあげた。軒低くさし出た松の葉にばさばさに幌の擦れあふ音がして、徐に車が後向きになると、ネルの格子縞の半身が、淋しさうに會釋した白い顔が、がらがらと消えて行つた。

檜の垣添へに、細かい雨に濕つた土に新しい轍の跡が並んで残つた。

私は夏痩せのだるい體を柱にもたせたまゝ揺られ揺られ遠ざかつて行く車の音と、格子戸の下に憚つたやうな音をたてゝ居る雨の音を聞いて居た。

さびしい、けれども何處か氣が張つて居てその思ひがつきつめられない、そのつきつめられない侘しさに、私はその淋しい思ひを極めたい爲めに、

『さびしい今日から私はこの家に独りぼっちなんだ！』

と心に繰りかへしてみた。

たわいなく取りとめもなく笑つたあとを、お互にでもつまらなさゝうに淋しい顔をして黙り込んでしまふのに馴れた女二人の生活、つひしたことからこの夏の暑さに負けて、病みあがりの一人は薬代の工面にと故郷の信濃へかへることになった。

林と原と畑とに圍まれた丘の家に、訪ふ人もなくて四五日は過ぎた。此頃は灯ともし方から夜となれば殊に蟲の音が繁くなる。洋燈の火を細めてふらりと出た。

ひやひやしい夜の風に袂をふかせて、ふりかへりふりかへり道を行くと、松の樹の間に今抜け出て來た家の灯が、竹格子の隙戸に薄くうつて居る。道端の南瓜畑の夜目には白い花の下にも蟲の音があつた。下駄の音に近いのはハタとやんで、蹴るともなしに蹴つてゆく石ころの飛んだ先のがまたハタと止まる。後にはもうやりすまして心おきなく錆びた音を續けるのであつた。

××さんの家……櫓の立木に囲まれて道からは灯影も見えぬ家の人達が懐かしく、草深い飛石を傳はって行くと、心のまゝに繁った兩側の草が、初秋の匂いを運んでさやさやと袂に觸れた。

『何誰？ —— さん？』

萩の下枝から、小聰しく走り出た小犬の吠え聲に、縁側へつと出した奥さんの顔は灯影を後にして暗かった。

『やあ、 —— さん淋しいでせう、○○さんはいつ頃おかへりです？』

××さんの顔が重なって縁側に出ると、私はなんといいふことなしに安心して庭に佇んだ。

『ま おあがんなさい』

孤つ家の庭には圍ひもなく、延びた芝生を踏んで手を延ばせば、數十本哀れに立つたとうもろこしをぎイともぎとることも出来る。日廻りの萎えた花が月のない空あかりに哀れに傾いて居る傍には、コスモスの青い莖が細かい葉をつけて夜霧に繁って居る。

『まるでもう秋ですね』

と端近に××さんが立って言った。

空には高く星があった。

絶え間なく四邊を圍んで居る蟲の音は、黙って人々の考へがちりぢりになった時に、殊にそれが鮮かに聞えた。

『電車の灯を見に行きませんか』

私は思ひ出したやうにかう言つて、灯影の届かぬ芝生から足をぬいて緑の方へ寄つて來た。

『いきませう！ 一體 —— さん、あれは新宿から代々木に行く間のがみえるんでせうか、それとも代々木から千駄ヶ谷に行く電車なんでせうか —— 此間も會惠ともそのことを話したんですがね』

『さあ —— 』

私はかう言つたまゝ、ふと今まで無意識にまさぐつて居た手のうちのものを明るみに調

べて見ると、いつの間に摘み取ったものが、それは我毛香のまだ固い蕾であった。

底本…「水野仙子全集」第二巻

初出…「中央公論」明治四十四年九月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年九月三十日

[リンク…水野仙子「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)